



陳維崧と徐紫雲 : 明末清初の男色文学の分析

早川, 太基

(Citation)

未名, 39:1-34

(Issue Date)

2021-03

(Resource Type)

departmental bulletin paper

(Version)

Version of Record

(JaLCDOI)

<https://doi.org/10.24546/0100478215>

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/0100478215>



陳維崧と徐紫雲 —— 明末清初の男色文学の分析

早川 太基

はじめに

明末清初の文人として知られる陳維崧（一六二五～一六八二）における断袖余桃の癖は、在世当時から著名であり、没後の伝記にも明記され、現代の学界における文学史・社会史・性風俗史の著作のなかでも多く記載される。明清時代の士人社会では、男色はきわめてオープンに行なわれていたが、その特色は、多くの場合には歌舞演劇などの特殊技能を身につけた美少年が「愛される者」としての位置を担い、職業的階層のなかに組み込まれていることである。もちろん対等の階級の男性どうしの愛情などの例外についての記録も、けっして皆無ではない。しかし当時の文人たちが記録に残している多くの男色行為は、その階級構造だけを取りだせば、「愛する者」の地位は高く、「愛される者」は卑しく、両者の対等ならざる社会的関係が浮かびあがる。明清社会のような男色の形態は、大陸においては民国期まで続き、その間をとおして陳維崧の男色のエピソードは、風流なる佳話として語り継がれた。

同時に明清社会のなかの殆どの男色は、男女の結婚の制度とは矛盾をきたさない。前近代における婚姻は、家と家とを繋げ、一族の血筋を絶やすことなくバトンを渡すという礼教のなかでの人としての責務であり、実利的にとらえれば養い養われてゆくための一種の社会保障でもあった。陳維崧の生涯を少し調べても、正妻と結婚した

り、子をなすために妾を納れたり、美少年を愛することは、きわめてオーブンなたちで同時並行している。そして作品のなかにも、妻への細やかな情愛や、他の女性への恋慕を述べたと思われるもの^(四)、そして男性への愛情の吐露が、同居している。つまりは、あくまで婚姻による男女関係が主軸という意識は存在しつつも、個人の嗜好としての副次的なバイセクシャルは許容されていた。

本稿では以下において、この陳維崧の同性愛についての文学作品を分析し、詩歌としてどのような特色があるかについて議論を進め、同時にその人における同性愛のありかたについて探るものである。いずれの先行研究においても、陳維崧が多くに関連作品を残していることは周知の事実として言及されるが、一方その内容や表現方法にまで踏みこんだ検討は殆どなされていないのが現状である。

文学における男色は、春秋時代の作とされる「越人歌」が同性愛であると古来解釈されるように早い時代から見られ、とくに六朝貴族社会においては多くの「變童詩」が詠まれた^(五)。この悠久なる文学史の流れのなかでも陳維崧の男色文学が分析に値すると考えられるのは、次のような特殊性が存在するためである。(一)虚構の世界ではなく、(二)多くの詩歌において俳優の徐紫雲との歎情が、作者の実感として詠われる。(三)つまりは男色関係にある一人から一人への思いを記した内容が多くを占めるわけであるが、この種の作品群は少なくとも四十首以上あり、前近代における圧倒的多数を誇る^(六)。このように作品の成立背景と数量だけを見ても、作家としての陳維崧の個人的かつ内面的な部分へとつながるキーワードのひとつであり、さらには同性愛の文学史のなかでも重要な位置を占めている。それでは以下、まずは陳維崧と徐紫雲との二人の邂逅について見てゆこう。

一 陳維崧と徐紫雲との邂逅

陳維崧（一六二五～一六八二）、字は其年、号は迦陵、宜興（今の江蘇省宜興市）の人。陳氏は江南きつての名門であり、祖父の陳于廷（一五六六～一六三五）は左都御史、太子少保を拝した東林党の名士であり、父の陳貞慧（一六〇四～一六五六）は復社に属して「明末四公子」の一人として名を馳せていた。陳維崧は幼くして聡明であり、崇禎十二年（一六三九）、十五歳のときに郷試に参加する父に伴われて金陵に行き、復社の名士たちの集会に参加し、父の親友である「明末四公子」の冒襄（一六一一～一六九三）と交わりを結んだ。崇禎十四年（一六四一）には、十七歳にして童子試に首席合格して「諸生」となった。陳維崧の二十代は明末清初の乱世であり、亡国のあとには陳貞慧は「土室」にこもって交際を絶ち、親戚・知人にも死者が多く、財産も散逸した。順治十一年（一六五四）、経済的に困窮していたらしい陳維崧は、金陵において冒襄からの支援を受ける。順治十三年（一六五六）五月に陳貞慧が卒すると家の状況はさらに悪化した。順治十四年（一六五七）八月九日、三十三歳の陳維崧は友人たちとともに、南京の秦淮において病床に臥していた冒襄を見舞ったが、やがて恢復した冒襄から、自分の別業において学問を続けることを提案された。^八 翌順治十五年（一六五八）十一月七日、陳維崧は約束どおりに如臯（今の江蘇省如臯市）の街の東北にあった冒氏の別荘である水繪園を訪れた。一家をあげて大歓迎してくれたなかに徐紫雲の姿があり、その時の思い出は、のちに陳維崧自身によって次のように詠まれる。

阿雲年十五、媚好立屏際。笑問客何方、横波漾清麗。^九

紫雲は十五歳、美しく屏風のそばに立っていた。微笑みながら「お客様はどちらから」とたずね、流し目に、清らかな麗しさを漂わせた。

徐紫雲（一六四四～一六七五）は、字は九青、号は曼殊、広陵（今の江蘇省揚州市）の^(二〇)人、この時には冒襄の家の演劇団の役者であつた。水絵園では、戯曲作家としても著名な阮大鍼（一五八七？～一六四六）の家の楽団にいた陳九が戯曲を教えており、^(二一)水準は非常に高く、しばしば阮氏直伝の「燕子箋」が演じられた。演劇団の役者には、徐紫雲のほか楊枝・秦簫・陳靈雛などがいたが、いずれも粒ぞろいの美少年であつた。各の長ずるところがあり、徐紫雲は歌舞に巧みであり、^(二二)また洞簫を吹いた。^(二四)なかでも徐紫雲の美貌はすば抜けていたらしく、たとえば瞿有仲「留別巢民先生」にも「秦簫為歌楊枝舞、就中紫雲尤媚嫵（秦簫は歌い、楊枝は舞い、なかでも紫雲はもつとも美しい）」^(二五)とあり、冒襄の母舅の馬鳳毛のようなファンもいた。^(二六)冒襄は來客を好み、演劇を催し、客たちは詩歌を作つてそれを讃え、みな冒氏が編纂した『同人集』に収録された。陳維崧もまた樂府体で「楊枝曲」「秦簫曲」「徐郎曲」を詠んでいる。

陳維崧は、この水絵園に住み、冒襄の息子たちとともに読書することになった。この後、たとえば康熙元年（一六六二）に帰郷したり、康熙三年（一六六四）二月に北行を試みたり、科挙に参加することはあつたが、基本的には水絵園に住んでいる。この生活は康熙七年（一六六八）、正式に北方に拠点を移すまで続いた。

やがて水絵園の生活に慣れてきたところに事件は起きた。同時代の鈕琇（？～一七〇四）の記した『觚賸』卷二「賦梅積雲」^(二七)には次のように書かれている。

有童名紫雲者、儂麗善歌、令其執役書堂。生一見神移、贈以佳句、并圖其像、裝為卷帙、題曰雲郎小照。適墅梅盛開、生偕紫雲、徘徊於暗香疎影間。巢民偶登內閣、遙望見之、忽佯怒、呼二健僕、縛紫雲去、將加以杖。生

管球無策、意極徬徨。計唯得冒母片言方解此厄、時已薄暮、乃趨赴老宅前、長跪門外。啓門者曰「陳某有急、求太夫人發一玉音、非蒙許諾、某不起也」。因備言紫雲事。頃之、青衣媪出曰「先生休矣。巢民遵奉母命、已不罪雲郎。然必得先生詠梅絕句百首、成於今夕、仍送雲郎、侍左右也」。生大喜、攝衣而回、篝灯濡墨、苦吟達曙、百詠既就、亟書送巢民。巢民讀之、擊節、笑遣雲郎。

童僕に紫雲という者がいたが、容姿端麗にして歌がうまく、書斎の管理の役であった。陳維崧は一目ぼれし、詩を贈り、姿を絵にかけて巻物にし、「雲郎小照」と名づけた。別荘の梅の花が盛りとなり、陳維崧は紫雲とともに梅林を散策した。冒襄がたまたま家の樓閣に登ったところ、これが遠くから見えたので、怒ったふりをして屈強な二人の下男に、紫雲を縛って連れ去らせ、杖で打とうとした。陳維崧はどうしようもなく、困惑するばかりであった。やがて冒襄の母に頼んで解決するしかないと思い、夕暮れであったが、隠居所に赴き、門の外にひざまずいた。門番に「某は奥様に火急に申しあげたき儀が御座います。お言葉を賜り、お許しいただかぬ先は、某は起きませぬ」と伝言を頼み、紫雲のことを詳しく話した。しばらくして侍女の媪が出てきて「どうぞお立ち下さい。冒襄は、母の命令を奉じまして、もう紫雲を罰しは致しませぬ。さりながら、もしも梅花を詠んだ絶句百首を、一晚のうちにお詠みいただけましたなら、紫雲を身のまわりのお世話のために差し上げましょう」と言った。陳維崧は大いに喜び、急いで帰ると、灯のもとで筆を濡らし、翌朝まで苦吟し、百首を詠みあげ、清書して冒襄に送った。冒襄は読んで撃節嘆賞し、笑いながら紫雲を陳維崧のもとにつかわした。

この事件の時期であるが、江南の春は早く、冒襄「除夕前一日同其年孺子諸君茶話孺子詩成即席遞為倡和得三首」^{二六}其一では、年の瀬の水絵園の様子を「梅花香戰雪（梅花の香りは雪をものごとく）」と詠んでいるため、十二月には花

が開いていたとわかる。さらに重要な情報をあたえてくれるのは冒襄「冬夜水絵庵読書諸子招陪其年時小季無譽木丹兩兒在侍即席限韻三首」^(一九)其三であり、「每驚風雨句、今日減清狂(いつも陳維崧の風雨を巻き起こす詩句には驚嘆するが、今日はどうも勢いが無い)」と詠んだ箇所の自注に「其年時有所暉、今晚詩成稍後、故云(陳維崧には親密なる人がいるので、今夜は作詩が遅れたことを指す)」と述べられる。本詩は、其二では「歳暮」と明言し、陳維崧の文才を讃えたあとに「莫嘆相逢晚(出合いが遅れたのを悔やむこともない)」とあるため、まだ水絵園に迎えて間もない順治十五年(一六五八)の十二月に詠まれたとわかる。その頃には陳維崧の忍ぶれど色に出にけりの恋慕の情は、すでに冒襄の知るところであり、「賦梅積雲」の事件も、この前後に起きたと推定できる。康熙元年(一六六二)に書かれた蔣大鴻「惆悵詞序」に、陳維崧と紫雲との関係を「分桃割袖、於今四年(男色の契りをかまし、四年になる)」(「詩集」卷一「惆悵詞」附録)と述べるのは、おそらく順治十五年から四年目として数えるのだろう。このように二人の關係は、一兩月という短期間のなかでの急接近であった。ちなみに、この事は文壇でも人口に膾炙し、陳碧城(一七七一〜一八四三)の「水絵園雜詩」^(二〇)其二にも、次のように書かれている。

翠被焚香事有之、紫雲応復勝楊枝。伽陵才子多情甚、肯賦梅花百首詩。

翡翠の褥に香をくゆらし、契りは交わされたが、紫雲はきつと楊枝よりも美しかった。才子の陳維崧は感性豊かに、梅花の百首の詩を書きあげた。

このころの陳維崧は、日常の生活費においても厚い援助を受けていた。張潮(一六五〇〜一七〇九?)の『虞初新志』によれば、陳維崧は一年あたり三百金あまりを要求した。冒襄はあまりの大金に驚くと、「我不須金、但以某

郎伴我、一夕一金可耳〔私はお金などいりませんが、かの美少年が私といっしょにいるからには、一晚あたり一金です〕^(二)と答えたという。もともと一年あたり三百金は多きに過ぎるようであり、冒広生「雲郎小史」四では伝えられた話として、一月あたり三金を要求したと記されるのが、金額としても妥当であろう。

しかし、このような出費は当然のことながら冒襄の家の経済状況を圧迫し、『清史稿』本伝には「家故有園池亭館之勝、……喜客、招致無虛日、家自此中落、怡然不悔也〔家はもとは庭園や邸宅があつて立派であつた。……来客を好み、毎日のように招待客があり、家は傾いたが、涼しい顔をして後悔しなかつた〕^(三)とある。国が滅亡し、あまりにも多くの死を見た冒襄は、おそらくは最初から財産をすべて使い果たす覚悟であつたのかもしれない。

陳維崧は、水繪園では風流三昧の日々を過ごした。紫雲以外にも、楊枝のことも寵愛していたらしく、友人の噂にもほつていた^(四)。そもそも「楊枝曲」〔補遺〕三三にて「詢來知是楊家子、我取楊枝作小名〔君は楊氏の出身だと聞いたので、私は「楊枝」と呼び名をつけた〕と述べられるように、これは抑も陳維崧自身がつけた名であり、特別な感情があつたのは間違いない。

ともあれ、詩才によつて徐紫雲を手中の珠として迎え入れた陳維崧は、「東臯作客五六載、阿徐日日相流連〔如臯の地に逗留して五六年、紫雲とは毎日いっしょにいた〕^(五)という暮らしを楽しんだ。ある時、冒襄は「懷其年」^(二五)其二という詩を詠んでいる。

憶爾当余病、頻頻呼紫雲。人遙視所愛、想結耳如聞。……。

君は、私が病気でも、紫雲を呼んでばかりいたね。愛される人は、愛する人を見つめ、心がしめつけられ、耳もそぞろ。

この詩は、愛しき人に夢中になっている陳維崧を、ユーモラスにたしなめる口吻であり、病中の出来事に言及するのは、冒襄と陳維崧との二人の関係性が前提としてあつてこそその揶揄である。少しはめを外しがちな亡友の子を、慈父のかわりに思いやる眼差しと言つてよいだろう。

二、陳維崧の作品に見られる徐紫雲の姿

さて陳維崧の男色に関連した作品の繫年については、冒広生「雲郎小史」^(二六)以来、現代の年譜研究にいたるまで様々に試みられている。しかしながら詩集の大部分はもとから編年で編纂されているのでわかりやすいが、他の文体の作品については、題や自注に明記されたものを除いて厳密には困難である。そこで確実に繫年できるものを軸にしつつ、内容や表現の近似などの要素を組みあわせながら分析してゆこう。

現存作品のなかで最も早く男色に関連し、かつ徐紫雲に思いを寄せたと分かるものは、康熙元年（一六六二）の「惆悵詞二十首別雲郎」（「詩集」巻一）である。内容的にも、多様な感情が二十首の連作のなかに吐露されており、陳維崧の男色文学の中核を占める。この年、陳維崧は冒襄の援助を得て、父母を合葬するために帰郷したが、同時に徐紫雲と暫くのあいだ別れることになり、この作品が生まれた。まずは「二」をみよう。

乍見筵前意便親、今生憐惜夙生因。莫言自小青衣賤、也是江淹伝裏人。

ふとした宴席での出会いから親しくなれた。今生での愛情は、前世の因縁であろうか。「幼少より賤しき童僕です」と口にははいけない。かの江淹も貧しかったと伝記にある。

徐紫雲は一介の俳優として冒氏の家つきの身分であり、陳維崧とは決定的に身分が違ふところから、卑下した言葉が吐かれた。しかし陳維崧はそれを否定し、貧しかったが学問を好んで出世した江淹を引きあいに出すのは、生まれなど気にするに値しないと説くのだろう。ここには、主人と童僕という立場をこえて平等な関係を築こうとする陳維崧の気持ちがあらわれている。このような思いは「十七」ではさらに顕著である。

鵲腦將殘酒再斟、此生何以報知音。斷紈碎墨無多語、珍重文人一片心。

二人の気持ちが一つになる「鵲腦」の酒を、もう一杯傾けよう。生涯をかけて、知音の情にこたえたい。たとえ紙や墨では言葉足らずでも、文芸に生きる私の心はすべて君のものだから、君に大切にしてほしい。

陳維崧は、身分違いの徐紫雲を「知音」と呼び、一生かけて、知音の情に報いたいと説く。報いる方法として述べるのは、その心余りて言葉足らずといえども、ぜひとも文人たる自己の心をさしあげるから、君に大切にしてほしいと懇願する言葉である。このような徐紫雲の存在は、連作の「三」では、陳維崧自身の卑下とともに説かれる。

命不如人黯自傷、只緣家難滯他鄉。旅窓若少雲郎顧、海角寒更倍許長。

誰よりも不幸な運命を、ひそかに恨む。家道の衰えのために他郷にくすぶるとは。旅の窓辺、もしも紫雲の優しさがなければ、海辺の寒夜は長く思えた。

陳維崧は名門の富豪の子弟という地位から、いつきに経済的に転落したわけであり、その落差への感慨が「命不如人」という表現にこめられている。このような不遇の仮寓の身であるからこそ、「知音」の存在が引きつたわけであり、「海角寒更」のなかに徐紫雲が存在することにより、空間そのものが暖かくなる感触が詠われる。類似する感覚は「九」の「水晶楼角幾時暖、独坐待君帰不帰〔水晶の透きとおる楼閣の片すみは、いつ暖かに？じつと坐つて君の帰りを待つ〕」にも見られる。つぎに徐紫雲の姿が、具体的に描かれる「八」「十二」の二首を見てみよう。

記得端陽五月中、君曾薄醉倚疏櫺。分明一幅瀟湘水、斜墜明霞數縷紅。

今や懐かしき端午の節句、君は微醺をおびて格子窓によりかかっていた。鮮やかな一幅の瀟湘図のなかに、夕焼けは斜めに照らし、幾本もの紅の線があらわれた。

城南定恵前朝寺、寺对寒潮起暮鐘。記得与君新月底、氷紋衫子捕秋虫。

街の南、前朝からの定恵寺、寺は冷やかな潮の流れにのぞみ、夕暮れの鐘が鳴る。思いだすのは君と、宵の口の月明かりの下、氷模様の服あざやかに秋の虫狩をしたこと。

二首ともに、時空のなかの座標のある一点が切りとられ、君と過ごしたあの場所のあの時間こそが、かけがえのない宝物であるという感覚が表現されている。前者は格子窓から漏れる夕日、後者は月明かりのなかの服の模様と、どちらも光線を巧みに用いた表現であり、視覚的に印象深い。どちらも短いながらも、人生の方向性をも牽引するような力を持った時間の一かけらであり、詩人の心に深く刻まれた。

この美しき容姿の徐紫雲は、かなり強い性格であったらしい。康熙二年（一六六三）に作られた五言長篇「將発如臯留別冒臯民先生」（「詩集」卷一）は冒裏に暇乞いする内容であるが、しめくりは次のように詠まれる。

阿雲久侍予、憐其母新斃。坦率易失歡、与人多睚眦。念此尚難忘、上者那能替。千秋鮑叔恩、前修以為勵。

徐紫雲は、私のそばに長らくおり、近ごろは可哀そうに母親を喪いました。率直すぎて問題はかり起こし、いつも憎んだり、憎まれたり。これを思うと心配です。紫雲は最高すぎて替わりがないのです。いにしえの鮑叔牙のごとき紫雲の恩義は、管仲のように私の心を発憤させました。

わざわざ長篇の最後に「管鮑の交」を持ちだして詠むのは、冒裏が、徐紫雲のような素直な美少年を自分付きにしてくれたことが自分の向上につながったというロジックで感謝の意味を含ませ、同時に紫雲に引きつづき目を掛けてほしいと暗に頼むわけである。次に制作時期は不明であるが、陳維崧と徐紫雲との日常生活をかいま見ることのできる作品「極相思」（「詞集」卷三）を読んでみよう。題注に「夜飲友人所。阿雲待余不至、留詞而去、帰後和之」〔夜に友達のところへ飲んだ。紫雲は待っていたのに私が帰らなかつたので、詞を残して立ち去つた。私は帰つてから韻に和して詞を填めた〕とあるのが創作の背景である。

如塵如夢如糸、脈脈意誰知。帰來恨晚、休揺屈戌、慢叩呆愚。○一陣碧虛窓外雨、三通鼓 人去多時。空留彩句、蜜花箋淡、鳳脛灯敲。

塵・夢・糸のように細やかな思いを、知るのは誰？わたしの帰りが遅いのが嫌でも、蝶番をカタカタさせ、

窓の金網を叩かないでくれ。

むなしき碧に染められた窓の外の雨、時を告げる太鼓がいくつも鳴り、君は去り、時は過ぎた。美しい詩だけが残され、甘い花模様の紙の文字は淡く、鳳凰の足のかたちの燭台の光は弱まる。

この記事から徐紫雲には填詞の心得があったとわかるが、作品は一首も伝わらない。詞牌も「極相思」と心憎い名のものを選んだところにも文学方面の教養がうかがえる。陳維崧の和作は、短令の限られた字数であるからこそ「屈戌」「罌罌」「蜜花箋」「鳳脛灯」などの小さな具体物をピックアップし、空間をミクロに描きだす。先ほどまで紫雲がいたことによる甘い雰囲気と、不在の虚しさとが交錯し、余韻に富んだ造りになっている。おそらくは同じく水絵園に暮らしていた頃の作であろうと思われるのが「水調歌頭・留別阿雲」（『詞集』卷十四）である。

真作如此別、直是可憐虫。鴛鴦麝薰正暖、別思已匆匆。昨夜金尊檀板、今夜曉風殘月、踪跡太飄蓬。莫以衫痕碧、偷搵臉波紅。○分手処、秋雨底、雁声中。廻軀攬持重抱、宵箭悵將終。安得當歸葉缺、更使大刀環折、萍梗共西東。絮語未及已、帆勢破晴空。

まことに別離のときが来た。けつきよく男は憐れな虫けら。鴛鴦の褥、麝香の香りは温かに、別れの気持ち之急きたてる。昨夜は金の酒壺を傾けて檀板を聴いたが、今宵が明ければ暁の風、色褪せた月、飛蓬のように旅路を進むのだ。碧の衣に痕がつくから、真っ赤な涙目を拭わないでくれ。

別れの時、秋雨は重く、雁が鳴いた。身をひるがえて両手をひろげ、またも抱きあい、夜明けが怖い。葉剤「当歸」の名のように帰りたいが、品切れかもしれない。刀の柄の「環」のように「還」りたいが、折れた

ら仕方ない。浮草の身は、西へ東へ別れゆく。話は尽きないのに、帆は青空いっぱい風をはらんで出航のときだ。

別離の哀しみ自体は深刻に詠まれるが、楽府由来の「当帰」「大刀環」などの言葉遊びをしているのは、あくまで一時の別れであると分かっているための余裕であろうか。穿った見かたをすれば、全体として哀しみというよりも、むしろ自分のために泣きはらしてくれる美少年を描写し、慕い慕われる関係を書き起こすことへの陶醉を感じさせる。同様の作品は「曲遊春・花朝」〔詞集〕巻二十〕である。江南の春の美しさを説いた前関につづき、後関ではこのように詠まれる。

回首天桃露井。憶檀板銀罌、那時儂並。人在花朝、有嬋娟姿格、玲瓏情性。自後堂分袂、長則是如醒似病。可惜憔悴蘭成、淒涼家令。

ふり返ると桃の咲き初めた井戸が見えた。思いだすのは檀板・銀の酒壺——あの時には寄り添う君がいた。君は花咲く朝に、嬋娟たる姿、玲瓏と澄みきった心。あの部屋での別れから、醒め果てぬ酔いに溺れ、病んだまま。憐れなのは憔悴した庾蘭成、寂しき沈家令。

本作品は「檀板」が詠みこまれ、また蕭韶を愛した「庾蘭成(信)^(二七)」と、若きころに男色を好んだ「沈家令(約)^(二八)」との二つの故事で結ぶところからも、徐紫雲に関連する作品と推定できる。桃の花咲く井戸が見えると、外貌も内面もともに美しき人のことを思いだして、心は悲しみに酔いしれるばかり。たしかに「憔悴」「淒涼」という状態で

あるが、それは同時に「だからこそ、早く会いたい」という希望が見え隠れするゆえの、甘酸っぱい哀しみの表現に見える。

康熙三年（一六六四）^(二九)、陳維崧と徐紫雲との関係性のなかで、最大の事件が起きる。二十一歳になった徐紫雲が結婚したのである。当時の社会では成人した童僕に結婚させるのは抱え主としての責務である。康熙四年（一六六五）、王漁洋が水絵園に来たときに紫雲に硯を持たせているところからも、結婚後も童僕として冒氏の家に属す立場であったとわかる。^(三〇) さて冒襄は社会的責任から紫雲を結婚させなければならず、徐紫雲は主人の好意を拒めず、また陳維崧としては居候の身であり、且つまた徐紫雲の将来も考えねばならない。結婚こそが徐紫雲のためというのは、冒襄と陳維崧との両者に共通した思いであったろう。^(三一) 陳維崧は、この結婚に際して「賀新郎・雲郎合巹為賦此詞」（詞集）巻二十六）を填めた。

小酌醲醲釀。喜今朝。釵光鬢影、灯前滉漾。隔着屏風喧笑語、報道雀翹初上。又悄把檀奴偷相。撲朔雌雄渾不辨、但臨風私取春弓量。送爾去、揭鴛帳。○六年孤館相依傍。最難忘紅蕤枕畔、淚花輕颺。了爾一生花燭事、宛轉婦隨夫唱。努力做、莫佔模樣。只我羅衾渾似鉄、擁桃笙難得紗窓亮。休為我、再惆悵。

釀された酒を酌みかわす。喜ばしきは今朝、簪のかがやきと寝具の影とが、灯の明かりに映えること。屏風のむこうからは笑い声、孔雀の髪かざりを挿したのだ。そして、ひそかに潘岳のごとき美少年を盗み見る。美しき二人の性別は、兎の雄雌のように不明だが、風にもかうと纏足の歩みから見とれる。君を送りだそう、鴛鴦の帳をかかげて。

六年の孤独な住まいには、愛しい君がいた。忘れられないのは、神仙の用いる「紅蕤の枕」の側、涙の花を

散らせていたこと。君のために一生の大事である婚儀を行ったあとは、夫唱婦隨の結婚生活を送ってほしい。努力して、よき「夫」になってほしい。私の布団は鉄の冷たさ。竹の莫塵に横たわり、薄絹の窓掛けが白む朝を待つ。でも私は平気だから、気にしないよね。

「藁砧」とは古楽府に見られる「夫」の隠語。場合によっては男色文学の「詞」における最高峰と見なされる本作の見どころは、まずは全体の構成である。前半部分は、典型的な「賀婚」や「催粧詞」の書きかたであり、華やかな祝福ムードにつつまれ、最後にはみずから簾をかかえて送りだす。しかし後関では突如として爆弾をはなち、陳維崧と徐紫雲には、艶めかしい涙にまみれ、二人だけの秘密の花園での戯れの時間があつたと告白される。とたんに前関の華やぎは、単純ならざる色彩を帯びはじめた。

また後関では「努力做」「休為我、再惆悵」などの相手に勧める言葉が、華麗なる事物のなかに突如ぼつんと置かれることにより、あたかも作者の肉声として作用する。しかし、衝撃的な告白のあとに敢えて配置されるために、建前に包みこんだ言葉のように空虚に響くが、同時に自己の感情を押し殺した結果としての相手への思いやりであるために、より深みのある情愛が両者のあいだに存在する雰囲気醸しだす。徐紫雲の「一生」を思うがゆえの喜びと、抑制せざるをえないために却って凝縮される哀しみが、あるいは表裏一体に重なり、あるいは闘ぎあう複雑な感情を表現している。

このような切なすぎる心を描き切った作品は、世間からも高評価をうけ、鈕琇（？〜一七〇四）は「此詞競伝人口、聞者爲之絶倒（この作品は人口に膾炙し、読んだ人は感服した）」と記す。陳廷焯（一八五三〜一八九二）が「雲郎合番詞、未免俚褻。〔賀新郎・雲郎合番為賦此詞〕は、俗であり猥褻である」と述べるのは恐らく、ベッドシーン

や感情表現の生々しさを嫌ったためであろうが、それは視点を変えれば、本作品の魅力の所在である。

この頃、陳維崧の友人である画家の陳鶴は「雲郎出浴図」^{三五}を画いた。この絵は旅順博物館に現存しており、風呂あがりの紫雲が「水碧衫」をつけて巨石の上に坐り、かたわらには洞簫が置かれている。「出浴図」は、古来の画題「楊妃出浴図」の影響下にあり、佳人が脂粉の虚飾をすべて洗い流し、潤いに富んだ肌を誇るといふ、いわば天然の美しさを表現するものである。

この絵に「九青図詠」や「九青詩詠」と呼ばれる多くの詩歌が付随するのは、陳維崧が周囲の高名な文人たちに題詠を書きこむことを頼んだ結果である。このように広く作詩を乞うたのは、第一には紫雲の美しさを永遠に言葉の世界に閉じこめるためであろうか。作詩時間がわかるものとしては康熙三年（一六六四）の初夏、林古度（一五八〇～一六六六）の詩が一番早い。絵画の制作年代も、それをあまり遡らないころと考えられる。つまりは紫雲の結婚前後に始まったらしいのは、おそらくは喪失した佳人を画としてだけでも手元に残したいという願望の現われであろうか。あえて穿った見かたをするならば紫雲への情愛の所有権の占有を、文壇に広く知らしめるためであるうか。陳維崧は、そこに生きがいを見いだすかのように題詠を依頼して回り、計七十五人、詩百六十首・詞一首の作品が生まれた。さらには後世の人も書き足していった結果、最終的には計九十三人、詩二三五首、詞二首という長軸となっており、ほとんど一種の文化現象と見なせる^{三六}。

しかし、陳維崧の行為は、同時代の人にとっても行き過ぎたものとして奇異に映った。若いころからの友人であり、陳維崧とともに「毗陵四才子」に数えられる董以寧（一六二九～一六七〇）が康熙七年（一六六八）に書いた「答陳其年書」^{三七}は、詩を書くのを激烈に拒絶する内容である。いちおうは同性愛のことを「此固吾輩失意之人、支離潦倒之所托也。僕向者亦常久溺於此（たしかに我らのごとき不遇なものが、やむにやまれぬ気持ち）を發散するにちよ

うどよい。僕ですら長いあいだ耽溺していた」と肯定しながらも、そのために子供ができず、自分の父に孫を抱かせてあげられなかったことを悔やむという経験を述べ、「頼吾子勇於自悔耳〔あなたにも猛省していただきたい〕と迫る。董以寧が問題としたのは、この年に四十四歳の陳維崧には後継ぎがないことである。陳維崧は崇禎十四年（一六四二）十二月、儲氏と結婚して一子三女をなしたが、長女以外は夭折したために、子が無かった。つまり董以寧は同性カップルは生産性のない「無益之好」であると批判し、それに加担するような詩は書けないと述べるわけである。ちなみに陳維崧は康熙十年（一六七二）に商丘において妾を納めて子をなしたが夭折し、けつきよく実子ではできなかった。

康熙七年（一六六八）、陳維崧は、はじめて北上して北京に遊んだが、なんと徐紫雲が同行している。後年に冒襄に送った詩では「沈思前事差無負、曾勸銜泥老画堂〔例のことを思い返しても、疚しくはないので。燕のごとき紫雲には泥で巣づくりし、美しき家に一生いなさいと勧めたのですから〕^(三九)」^(三九)と言いついては、どうも紫雲は勝手に抜け出してきたらしい。このような時にかぎって、臨沂の青駝寺において冒襄の息子の冒丹書に鉢合わせし、二人でいるところを見られてしまった。^(三九)北京についたあとに面倒を見てくれた龔鼎孳（一六一五～一六七二）も、この件については心配し、わざわざ冒襄あての弁護の書簡を書いている。^(四〇)陳維崧の才を愛する冒襄は、けつきよくはこの件をとがめだてしなかつた。^(四一)

史家の張次溪（一九〇九～一九六八）によれば、徐紫雲の身につけた江南の本場の昆曲の芸は、たちまちに都人を魅了し、京師の演劇の風を一変させたという。^(四二)たとえば黄仲則（一七四九～一七八三）の「鶯啼序・鄭誠齋先生招集白雲庵周幔亭圖為小冊分賦用曹以南韻」でも「更十五雲郎、喚向尊前、歌声清濁」さらに十五歳の紫雲のごとき美少年を、酒樽の前に呼ぶと、歌声は美しい^(四三)」^(四三)とあり、すでに徐紫雲の存在は典故と化しているのは、このよう

な背景もあるためだろう。

陳維崧と紫雲は、この年とともに江南に帰るみちすがら、邯鄲の呂洞賓の廟を通りかかった。徐紫雲は「邯鄲夢」を演じるのが得意であり、(四四)陳維崧はこれにちなんで「滿江紅・過邯鄲道上呂仙祠示曼殊」(「詞集」卷十一)を填めた。

糸竹揚州、曾聽汝臨川數種。明月夜黃梁一曲、綠醅千甕。枕裏功名鷄鹿塞、刀頭富貴麒麟塚。只機房唱罷酒都寒、梁塵動。○久已判、緣難共。經幾度、愁相送。幸燕南趙北、金鞭双控。万事関河人欲老、一生花月情偏重。算兩人今日到邯鄲、寧非夢。

音楽の都の揚州では、君の歌う湯頭祖の戯曲を聴いた。明月の夜、黄梁の夢のものがたりを聴きながら、美酒を痛飲した。夢枕では鷄鹿塞を攻略する大功を立てたが、富貴の身もけつきよくは石の麒麟がならぶ墓に葬られた。「機房」を歌い終わると爛酒は冷め、美声のために梁塵は震えた。

わかつてはいる、いつまでも一緒にはいられない。幾度も、送別こそが哀しみだった。幸いに燕趙の地を、ともに黄金の鞭を揮って旅ができた。事多く、旅路のなかに老いゆき、花も月も愛する生涯は、情の重みが増すばかり。君と二人、今日、邯鄲に着いたのも夢なのだ。

全体的に邯鄲の夢の典故を下敷きにしており、「機房」とは、『邯鄲記』「織恨」に盧生の妻の崔氏があらわれる一段を指す。前関では「邯鄲夢」を演じた揚州の夜のことを、華麗な言葉に満ちた鮮烈なる世界として歌いあげる。後関では、いきなり「久已判、緣難共」と述べる。自分と徐紫雲との関係は、いつかは解消せざるを得ないことは承知している。しかも人生のすべては、邯鄲の夢にすぎないかもしれない。しかし、それゆえに二人で旅行に來ら

れた今のこの一瞬一瞬の君との時間を愛おしむ。『白雨齋詞話』では本作品を「極蒼涼、亦極雄麗、真才人之筆〔凄絶をきわめつつも雄渾な麗しさをきわめ、まことに才ある人の筆致である〕」^(四五)と批評し、悲しみと美しさとが入り混じるがゆえに壮絶な詩情が織りなされていることを指摘する。

このあとの徐紫雲は、比較的自由に冒氏のもとを抜けだし、陳維崧とともに時間を過ごすことができたらしい。康熙九年（一六七〇）、河南懷州（今の河南沁陽市）にいる陳維崧のもとを徐紫雲がおとずれた。^(四六)翌年十二月に詠んだ「冬杪十六日九青風雪入商丘賦詩懷之」（『詩集』卷五）を見ると、またしても江南から河南の商丘まで陳維崧のもとを訪れている。

鷄鳴白月盱眙縣、馬滑黃河武陟城。偕汝風濤剛隔歲、累卿冰雪又單行。伯桃作客衣裝薄、狐偃從亡骨肉輕。此意凄然吟不穩、粉箋濕透淚盈盈。

鷄鳴、青白い月、盱眙縣。馬が黄河ちかくの路の悪さに足をすくわれる武陟の街。汝と風波をともにした記憶から、ちょうど一年が過ぎ、君を苦しめる氷雪のなかを、一人で来させてしまった。伯桃が雪の旅路で餓死したように貧しき衣服であり、狐偃が重耳の亡命にしたがったために狐突は死んだように、親の死に目にも会えない。この凄然たる気持ちに言葉にすると胸が疼き、桃色の便箋に涙がにじむ。

首聯では、冬場の行路の苦しさを述べている。「汝」と苦難をともした去年の記憶がよみがえり、同時に「卿」が一人で来た今年もいかに大変であったかを想像する。わざわざ自分のために冬場の長旅をいとわずに来てくれた徐紫雲を思うと、陳維崧はあふれあがる涙をぬぐいもせず、便箋に滴らせるばかりであった。いつのころの作品

かわからないが、「灯下絶句」^(四七)には次のように書かれている。

十載江湖落拓身、徐郎相見即相親。自從小別三秋後、不信心間有壁人。

十年間、世間でも落ちぶれた身は、徐紫雲に逢い、親しくなれた。暫しの別れから三ヶ月、やはり君の美しさが世界一だ。

「壁人」は美男子の衛玠を評した典故ある語。このように陳維崧にとっての徐紫雲は、真価を認めてくれる知己であり、美しき恋人であり、すべての意味において人生における唯一の人として表現される。別離の最中には、「紫雲」という名の硯にさえも懐かしみを覚え、二十六文字の銘文「不見紫雲、重見紫雲。摩挲久之、松麝氤氳。捧侍何必石榴裙。陳維崧〔紫雲に会えなくても、紫雲硯に会えた。しばらく撫でると、墨の香りがただよう。君さえ側にいてくれたら、石榴色のスカートの侍女など必要ない。陳維崧^(四八)」を刻んだ。また詩句「心情倚醉誰能那、忽憶天涯有阿雲〔心は酔にまかせて自由だったのに、突如として天涯の紫雲を思いだした〕^(四九)」や、「為臨秋水憶清揚〔秋の水の流れにむかうと、清らかな姿を思いだす〕^(五〇)」においても詠まれるように、その面影はふとした拍子にさえ脈絡もなく浮かびあがり、詩人の詩心をくすぐる。

陳廷焯は「閑情之作、非其年所長〔情愛を詠んだ作品を、陳維崧は得意としない〕^(五一)」と批評するが、たしかに陳維崧の手法は、普通の「閑情」のジャンルのような美人の容姿を微に入り細を穿つ詠みかたとは異なる。作品のなかに出現する紫雲は、けっして客観的な立場から、魅力ある部分をライトアップされるのではない。陳維崧の作風は、全体的には鮮やかな視覚的效果が用いられるにも関わらず、紫雲の容姿については具体的にはほとんど言及されな

い。最も視覚的要素が活写されやすい楽府体の「徐郎曲」(「補遺」三)においてすら同様である。紫雲の姿は、かならず自分との関係性のなかで現われて来るのであり、つまりは主観的に思いだし、見つめている視界のなかにある。同時に作品のなかに詠みこまれる衣服・装身具・動作などの事物の一つ一つが、けっして宙に浮いた言葉遊びではなく、紫雲という個人の記憶にしっかりと結びついているからこそ、血の通った世界を描きだせている。

このような描きかたは、まさに陶淵明の「閑情賦」がそうであるような片思いの一方通行の恋情ではなく、両方向からの情感の流れを感じさせてくれる。いふなれば外見の品定めをするような書きかたではなく、形而上の交流が存在するからこそその表現的特色であり、つまりは感情を持った人間の心と、もう一つの心が触れあうときの微妙なゆらめきを掬い取る書きかたである。

三、徐紫雲にむけた悼亡作品

このように唯一無二の存在として描かれる徐紫雲は、康熙十四年(一六七五)、陳維崧が五十一歳のときに三十二歳にして死んだ。^(五三) おそらくは冒氏の手によって近隣の地に葬られたと考えられるが、民国十三年(一九二四)二月、冒広生が墓所を探したときには、すでに見つからなかった。^(五三) その死から、一番近いころに作られた陳維崧の作品と考えられるのは「摸魚兒・清明感旧」(「詞集」卷二十九)である。

正輕陰 做来寒食、落花飛絮時候。踏青隊隊嬉遊侶、只我傷心偏有。休回首。新添得一堆黄土垂楊後。風吹雨溜。記月榭鳴箏、露橋吹笛、說着也眉皺。○十年事、此意買糸難繡。愁容酒罷微逗。從今縱到岐王宅、一任舞衣輕鬪。君知否。兩三日 春衫為汝重重透。啼多人瘦。定來歲今朝、紙錢掛處、顆顆長紅豆。

まさに花曇りの寒食は、花が散り、柳絮が飛ぶころ。青草を踏み、楽しく遊ぶ人々のなかに、私だけが心の傷を埋めきれない。もう振りかえるのは、やめよう。新たに増えたのは、しだれ柳の下の土饅頭。風が吹き、雨水がたまる。月明かりの館のなかで箏を鳴らし、露の結ぶ橋では笛を吹いたことを、言葉にするだけで哀しみが眉に押しよせる。

十年の出来事、この気持ちは、とても糸を買って刺繍するようには表わせない。憔悴した顔に酒が入ると、少しはよくなる。今や岐王のような豪邸を訪れても、にぎやかな舞には興味はない。君に知ってほしい。この二三日、春の服を着たら、ぶかぶかに緩いのも君のせい。泣きすぎて痩せたよ。きっと来年の今朝、紙銭を掛けた枝に、「相思」の赤い粒が実るだろう。

この詩が徐紫雲を悼むものとわかるのは、自筆本には題注に「時九青新逝〔最近亡くなった徐紫雲のために〕」とあるためである。^{五四}前関では、自分一人だけが清明節の春爛漫の華やきのなかに取り残される。後関では、けつして返答はないと知りつつも、亡き「君」「汝」に語りかけながら、近況を詠いこむ。「紙銭」を木の枝に掛けるという風習は現代でも場所によっては見られるが、その行為にこめられた哀しみに感応し、来年の今日には、愛情の象徴である真紅の粒が実るであろうと述べるのは、陳維崧独自の想像であろうか。絶望の果てにおける、新生への虚しすぎる希望が、この句にこめられる。このころに王漁洋にあてたと思われる「与王阮亭先生書」〔文集〕卷四の最後の一文も、つぎのように結ばれる。

作書将竟、忽憶曼殊、投筆泫然、不能終幅。

手紙を書き終えるころ、ふと徐紫雲を思いだし、筆を捨てたまま涙がこぼれ、もう何も書けなくなりました。

とにかく何をしていても亡き人のことが思い出されるわけである。この年の夏、陳維崧は北上して河南の商丘に行った。「江城子・沙隨感旧」（「詞集」卷八）の「沙隨」とは『左伝』成公十六年に見られる地名であり、商丘を指すため、内容を見ても、この時の作品と考えて矛盾しない。^{五五}

思量往事極分明。小徐卿、昵雲英。蕭寺幽窓、檀板勸銀罍。兩小一双描不盡、紅燭下、態盈盈。○西風捲去隔年情。寺鐘鳴、記前生。落葉中原、恰又趨離程。淡月曉風昏似夢、和淚也、出層城。

思い出はすべて鮮やかすぎる。徐紫雲は仙女「雲英」と親しくなった。寺の静かな窓辺、檀板を鳴らし、銀の壺の酒を勧めてくれた。二人に見とれてしまった——紅の灯のなかの美しき姿。

秋風に吹き払われた懐かしの日々。寺の鐘が鳴る、前世を胸に刻んだまま。落ち葉がふりそそぐ中原、さあ、旅路を急ごう。淡い月、暁の風、ほんやりと夢のように、涙ながらに、街をあとにした。

第一句で「分明」と述べる過去の記憶は、前関において、くつきりと言葉で描きだされる。徐紫雲と親しくなった仙女「雲英」は、おそらくは商丘で迎えた妾を指す。檀板・銀罍・紅燭などの具体物を用いた絵画的な空間のなかに、美しき男女の一对を配置する。後関は「西風」がすべてを吹き払ってしまったあとの凄惨たる世界であり、夢にも似た「淡月曉風」のなかを旅立つ。ほんやりと暗い情景は、前関とコントラストをなしている。その年の冬、無錫において詠まれた「五綵結同心・過惠山蔣氏酒樓感旧（余昨年与雲郎曾宿此樓（余は昨年、紫雲とこの樓閣に

泊まった(一) (詞集) 卷二十四^(五六) も、やはり前関後関の対比をうまく用いている。

惠山山下、誰氏高楼、記曾借我酣眠。夜半喧山雨、龍峰頂 飛掛百幅簾泉。當時尚有玲瓏在、憑闌唱 落葉哀蟬。可惜是 声声紅豆、憶來大半難全。○如今重絳樓下、只水声幽咽、髣髴鳴弦。彈指匆匆、旧時燕子、換做万里啼鵲。当墟莫喚樓前客、应怪我 淚裏紅綿。惆悵煞 一天明月、滿汀漁火商船。

惠山の麓、さる主人の高樓に、泊めてもらった私は熟睡できた。夜半に山からの雨音かまびすしく、龍峰の頂きから、一面に簾をかけたように瀧が流れ落ちた。あの時には、まだ商玲瓏のような人がいて、欄干に寄りながら「落葉哀蟬」を歌った。口惜しい——愛おしさに溢れた「紅豆」の歌声は、思い出しても全てぼんやり。今また高樓の下を通ると、水音がむせび泣き、弦の響きを髣髴とさせる。あつという間に、「燕」のような君は、万里のかなたに血に啼く杜鵑となった。居酒屋の娘も、樓閣の下の私を客引きしても無駄だよ、涙で紅のハンカチを濡らしているのだから。憂愁をかきたてるのは天空の明月、渚にどこまでも続く漁火と商船。

商玲瓏とは白楽天「醉歌」「霓裳羽衣歌」などに登場する、歌と箏篋とを得意とした杭州の妓女であり、詩語としては歌い手の意に用いられる。前関では、詩人は高樓で熟睡したり、雨のなか歌を聴いたり、心地よく爽やかな様子が描かれる。しかし紫雲が欄干にもたれて歌う「落葉哀蟬」とは、『拾遺記』などに見られる漢の武帝が李夫人のことを偲んで作った楽曲であり、すでに悼亡の伏線が引いてある。「紅豆」の歌声とは、李龜年が王維の詩「相思」を歌った典故を用いており、その歌詞「此物最相思 (この実は、たまらなく愛おしい)」を匂わせる。また同時に、歌声の艶やかに婉転たる比喩として受け取れるような効果も生まれている。しかし「我」が思い出そうとすればす

るほど、ほろほろと脆い記憶のカケラとして碎け散る。

後園では一気に現実にはひきもどされる。軽々と舞う「燕」のような君は、今や杜鵑と化したというのは、春心を胸に秘めた皇帝の典故であり、その死を物語るのだろうか。ゆえに居酒屋もならぶ繁華な場所であるが、楼閣を目前にすると路上で涙してしまふ。最後に描かれた「一天明月、滿汀漁火商船」という景色には、君のいない絶望の世界なのに、あまりにも普通の空間がひろがり、当たり前前の日常的時間が過ぎるばかりであることへの、一種のもどかしいばかりの違和感・悲愴感が込められている。

悼亡の一連の作品のなかでもっとも有名なのは「瑞龍吟・春夜見壁間三弦子是雲郎旧物感而填詞（春の夜、壁に三弦を懸けてあるのが見えたが、これは徐紫雲の遺愛の品である。胸に迫るものがあつたので詞を填めた）」（「詞集」卷三十）である。

春灯炮。拚取歌板蛛縈、舞衫塵灑。屏間乍見檀槽、与秋風扇、一般斜掛。○簾兒罅。幾度漫將音理、氷弦都啞。可憐万斛春愁、十年旧事、慊慊倦写。○記得蛇皮弦子、当時粧就、許多声價。曲項微垂流蘇、同心結打。也曾万里、伴我関山夜。有客向、潼関店後、昆陽城下。一曲琵琶者。月黑楓青、輕攏細研。此景堪图画。今日愴人琴、淚如鉛瀉。一声声是、雨窓閑話。

春のやわらかな灯に芯が残る。檀板の蜘蛛の巣をとり、舞装束の塵を払った。壁にふと見えた——三弦と棄てられた扇が、斜めに懸けてあるのを。

簾も裂けている。それとなく幾度も三弦をつま弾いたが、氷の弦の響きは喪われたまま。春の愁いは尽きず、十年の記憶は、書き起こすも物憂いばかり。

覚えている——この蛇皮線と、化粧うるわしき君の演奏への賞賛の嵐とを。楽器の湾曲した首に垂らした房は「同心結」に結ばれていた。かつて万里のかなたまで、私とともに旅寝の夜をすごした。客が耳を傾けた潼関の旅館、昆陽の街。奏でられる琵琶の曲。月は黒く、楓は青く、指で軽やかに弦を押さえ、こまやかに滑らせた。これこそ絵になる情景であつた。今や奏でた人は去り、楽器の響きも喪われ、この眼からは、金銅の仙人のように鉛の涙がこぼれる。この音も、この音も、雨降る窓辺にて語りあつた響き。

『白雨斎詞話』では本詞にたいして「遊糸落絮之情、雲湧風飛之筆、亦一時之雄也（ただよう蜘蛛の糸・飛ぶ柳絮のような情感、雲湧き風起こるような筆致は、一時代の代表である）」^{五七}と惜しみない賞賛を加える。あの時の檀板と衣服が、塵や蜘蛛の巣に覆われているのを、はらつて取り去る。これは時の流れのなかで色あせてしまった美しき思い出を、みずからの手で蘇らせる動作である。ふと目に留まったのは徐紫雲の弾いていた「三弦」であり、それをめぐる思いがメインテーマとして展開されてゆく。「三弦」をつま弾くことにより、かたちなき過去の記憶は、聴覚的な実感としてよみがえるが、しかし、あの時の澄んだ響きはまったく喪われていることに冷たい現実をつきつけられる。

後関では、勢いよく記憶が溢れだし、化粧姿もうるわしき徐紫雲がその手に「三弦」を奏でて大いなる賞賛を勝ちとり、それは同時に二人の旅路の途中であつたことを思いだす。今や「三弦」は、王献之の没後の琴のように持ち主に殉じて清らかな響きを喪失した。しかし、指で弾きだされた音の一つ一つは、あの日の雨降る窓辺において君と共有していた時空そのものなのだ。聴覚が、深層意識へとつながる契機となり、そして目に浮かぶ懐かしき空間と一体化する。

このように悼亡作品を分析してきたが、楊倫（一七四七〜一八〇三）の「湖海樓文集序」では「蓋先生之詩文、以氣為主。故雖鏤金錯采、絕無堆垛褻績之痕（先生の詩文は、「氣」が重要な役割を果たしている。故に華麗な表現が多くても、積みかさねたような印象を受けない）」^(五九)のように「氣」と表現するように、言葉と言葉とのあいだを満たしているものの存在が感じ取られるのが陳維崧の文学である。類似の感触については陳廷焯も「迦陵詞氣魄絶大、骨力絶適。……沈雄俊爽、論其氣魄、古今無敵手。〔陳維崧の詞は氣魄が大きく、骨が力を支えている。……沈着で雄々しくありながら颯爽としており、氣魄でいえば古今第一である。〕^(五九)と述べる。陳維崧は創作において極めて豊かな語彙力を駆使するが、隅々まで命が吹きこまれた華麗なる言葉からは、その行間から息遣いが聞こえてくようである。詞人として知られる朱彊村（一八五七〜一九三二）が「臨江南・雜題我朝諸名家詞集後」五で述べた「迦陵韻、哀樂過人多〔陳迦陵の作風は、誰よりも感情があふれている〕^(六〇)」という批評は、このような陳詞の悼亡作品において最も符合する。

四、まとめ——陳維崧の男色文学の捉えかた

以上のように分析してきた陳維崧の男色文学を、文学史の流れのなかに置いてみると、何が見えてくるであろうか。漢魏六朝以来の大多数の同性愛関係の詩歌は、美少年のなまめかしさを微に入り細を穿った楽府体の筆致によくよって詠むことが多く、明末清初にかけても盛んに創作された。^(六二)このような詩は、もちろん水準の高下の問題は別に考えるべきであるが、タイトルさえ隠してしまえば、かなり汎用がきく内容であることが多い。つまりは美少年であれば、そこに詠まれた対象としての「個人」は、じつは誰でもあてはまる。同時に作者としての「個人」もまた、どうしても誰かを特定すべき必要性はなく、作品に結びつけられるのは男色を好む詩人の「集団」である。

しかし、陳維崧の作品は多くの場合、徐紫雲との二人の間でのみ成りたつ関係性として表現され、また詠まれている時空の座標軸のその一点でなければならぬ必然性が、積みかさねた言葉のなかに込められる。いうなれば陳維崧の作品描写は、個と個の関係における情愛をあらわした詩歌のひとつの究極のかたちを示されている。陳維崧と徐紫雲とは身分的には対等ではない。しかし、陳維崧は卑下する徐紫雲をたしなめ、心許せる相手として描きだし、赤裸々な愛情をあますところなく披瀝し、さらには徐紫雲こそが己の生きがいであることを臆面もなく曝けだす。徐紫雲もまた、結婚して冒家に属する身分にも関わらず、みずからの意思で水絵園を抜けだして北行に従った。当時の陳維崧は布衣の身であり、科擧に七回続けて落ち、やっと博学鴻臚科の一等第十名にて翰林院檢討を授けられたのは、徐紫雲の没後四年目のことであつた。つまりは一番不遇な時代における「知己」であつた。両者の生き方、そして陳維崧の作品のなかに描きだされる両者の関係性には、時代・制度・身分などあらゆる障礙を、一足飛びに凌駕するような強い情愛・意思が表現されていることが確認できる。この意味でいえば両者の関係は、いわゆる男が男をという同性愛的な観点を用いて解釈できる以上に、ある個人がある個人を愛しているわけであり、単純な性の枠組みを越えた視点から捉えることも重要といえよう。

このような陳維崧の男色文学は、明末清初の乱世という時代背景と結びつけて考えると、更にその性質が見えてくる。国が滅び、親しき人々は非業の死を遂げ、生き残つた人々は利益によつて反目し、陰謀めいた告発が日常茶飯事となつた。清初には大規模の疑獄がしばしば起こり、陳維崧の周りでも「奏銷案」「通海案」「莊氏史案」などで非業の死を遂げた人は少なくない。このような互いに心許せぬ時代であるからこそ、利害を超越したものを根底とする価値観が、あざやかに浮き彫りになる。つまり、陳維崧における徐紫雲のような人間関係の構造式は、たとえば錢謙益における柳如是、侯方域における李香君、冒襄における董小宛のそれと、深部において共通点を持つ。こ

の人々の物語は、孔尚任の「桃花扇」が今日まで演じられ、学界でも陳寅恪『柳如是別伝』・冒広生「雲郎小史」が著わされ、冒襄『影梅庵憶語』が繰り返かえし研究されるように、時代を越えた共鳴性を有していることは言を俟たない。

陳維崧の男色文学とは、以上のような意味において明朝の滅亡と重ねあわせた壮大な叙事詩のなかの細部であり、同時に一個人と一個人との間にのみ成りたちうる抒情詩といえる。その詩の登場人物たる徐紫雲と陳維崧とは、文士の愛した美少年として、美少年に愛された文士として、長しえに一对として語られる存在となった。

注

本稿において引用する陳維崧の作品は、一部の例外を除いて全て『陳維崧集』（上海古籍出版社、二〇一〇年）に拠り、本文中の題下に巻数を示す。引用資料の前近代のものは、すべて中国基本古籍庫「版本対照」にて確認した。陳維崧・徐紫雲の生涯については冒広生「雲郎小史」（『青鶴』一九三四年）、陸勇強「陳維崧年譜」（中国社会科学出版社、二〇〇六年）、周絢隆「陳維崧年譜」（人民出版社、二〇一二年）を参考にし、年譜に言及する時にはそれぞれ『陸』年譜、『周』年譜とする。また論文執筆時に、華東師範大学副教授の鍾錦氏、南方週末讀書版編集者の劉小磊氏、台湾大学修士課程の宮瑞龍氏より、関係資料の提供を受けたことに深甚の謝意を表す。

(一) 例えば『陳維崧集』「附録」に収める蔣永修「陳檢討伝」、蔣景祁「迦陵先生外伝」など。

(二) 例えば詳細なものとして、蘇淑芬「從陳維崧与雲郎關係論清初士人男寵之好原因」（『東吳中文学報』七期、二〇〇一年）、村上正和「明末清初における士大夫の俳優扶養と雍正帝の芝居政策——近世中国における社会的結合の一側面」（『東洋学報』八九卷一号、二〇〇七年）、施暉「中国古代文学中的同性恋書写研究」（上海人民出版社、二〇〇八年）、張誇「論

清詞中の龍陽之癖——以陳維崧詞為例」(『韶関学院学報』三四卷、二〇一三年)など。

(三) 例えば袁枚と劉霞裳の士人どうしの関係は物議を呼んだ。施暉『中国古代文学中的同性恋書写研究』第四章、四節、一、三「袁枚」与弟子劉霞裳的師生恋情」を参照。

(四) 『周』年譜」附録二・第四節「言情詞」を参照。なお周氏の論述は、陳維崧の文学における女性への情愛の分析にかなりの重きをおく。しかし筆者は、とくに夫人に関する作品には、「贈孺人諸氏行略」(「補遺」一)に顕著な「贖罪」の意味が強いと考える。

(五) 何水英「從『玉台新詠』看中国古代詩歌对同性恋的表现」(『安徽理工大学学報(社会科学版)』十卷四期、二〇〇八年)に端的にまとめられる。

(六) 此処では確実に徐紫雲に関連すると思われる作品の概数のみを挙げた。他にも例えば陳維崧「天香・中元感旧」(「詞集」卷十五)では「只有小墳新塚、誰修薄祭(小さく新しき墓があるが、ささやかでも供物をあげる人はいるか)」と詠まれることから、冒広生「雲郎小史」六にて徐紫雲を悼む詞ではないかと言及されるが、確証はないために本稿では取り扱っていない。

(七) 冒襄『巢民詩文集』卷三「丁酉八月九日余病臥秦淮梅杓司陳其年戴務旃吳子班沈方鄴周式玉陳大匡劉王孫方田伯位伯衝泥過訪……」、康熙刻本。

(八) 冒広生「雲郎小史」一。

(九) 陳維崧「將発如臯留別冒巢民先生」(「詩集」卷二)。

(一〇) 徐鉉(一六三六〜一七〇八)の『本事詩』卷十二「徐郎曲」の注に見られる。

(一一) 冒広生「雲郎小史」六、末尾の条。

- (一二) 黄語「冒襄文人雅集对家楽戯曲的影響」(『河北学刊』三〇卷二期、二〇一〇年三月)を参照。
- (一三) 陳確庵『得全堂夜讌記』に「徐郎善歌」、王周臣「冒巢民五十壽序」に「紫雲善舞」とある。
- (一四) 陳維崧「望江南(宛城五日追次旧遊漫成十首・其七)」(『詞集』卷一)に「楊枝低唱紫雲簫」。
- (一五) 冒広生「雲郎小史」一より引用。
- (一六) 陳維崧「惆悵詞」其七(『詩集』卷一)の自注「馬羽長先生、最愛雲郎」。
- (一七) 鈕琇『觚賸』卷二「賦梅狝雲」、康熙臨野堂刻本。
- (一八) 冒襄『巢民詩文集』卷三。
- (一九) 冒襄『巢民詩文集』卷三。
- (二〇) 陳文述「頤道堂集」卷八、嘉慶十二年刻道光增修本。「伽」は原文に従う。
- (二一) 張潮『虞初新志』卷十九、康熙三十九年刻本。
- (二二) 『清史稿』卷五〇一「冒襄伝」。
- (二三) 董以寧『正誼堂詩文集』「詩集・七言絶句・二」の「山陰呂黍字自揚州携高小史至索和紅橋詞漫成十二絶」其一の注に「如臯冒氏歌董楊枝・紫雲、為其年所狎」とある。また張潮は『虞初新志』において陳氏の寵愛する「某郎」は紫雲やら楊枝やらと述べる。
- (二四) 陳維崧「過崇川訪家善百善百作長歌枉贈賦此奉酬」(『詩集』卷一)。
- (二五) 冒襄『巢民詩文集』卷三。
- (二六) 「雲郎小史」は徐紫雲の事跡を逐一調べあげたものであり、一九三四年に雑誌『青鶴』に六期にわたって掲載された。
- (二七) 『南史』「蕭韶伝」。

(二八) 沈約「懺悔文」。

(二九) 結婚の時期であるが、「雲郎小史」(『陸』年譜)では本年に、「周」年譜)では前年に繋ぐ。本節の「賀新郎」において徐紫雲と一緒にいた時間を「六年」と数えるのが唯一の情報源であり、起点をどこにするか、また「周年」か「年目」で計算するかで繫年が異なる。本文で論じたように順治十五年(二六五八)の十二月あたりを起点とし、「六年目」として数えれば、ちょうど本年にあたる。この計算法は、康熙元年(二六六二)の蔣大鴻「惆悵詞序」の「分桃割袖、於今四年」という記述とも呼応する。

(三〇) 王士禛『帶經堂詩話』卷八、乾隆二十七年刻本。

(三一) 陳廷焯(一八五三—一八九二)の『詞則』『閉情集』卷四(上海古籍出版社、一九八四年)における陳維崧「賀新郎」(小酌醪釀)の解説には、陳維崧本人が資金を出して結婚させたとする。

(三二) 張傑「中国古代同性恋之最」、『中国性科学』十八卷三期、二〇〇九年、三九頁。

(三三) 鈕琇『觚賸』卷二「吳觚」、康熙臨野堂刻本。

(三四) 陳廷焯『白雨齋詞話』卷三、八八条、人民文学出版社、二〇〇一年。

(三五) 「雲郎出浴図」の詳細については房学恵「簡析『紫雲出浴図』卷」(『東南文化』二〇〇六年一期)を参考にした。ちなみに陳維崧・徐紫雲の両者を時人が画いたものとして釈大汕「迦陵先生填詞図」があり、こちらは張傑「『迦陵先生填詞図』綜考」(『文津学志』、二〇二二年二期)に詳しい。

(三六) 文化現象的意義については、村上正和「明末清初における士大夫の俳優扶養と雍正帝の芝居政策——近世中国における社会的結合の一側面」に、戯曲の盛行とからめて詳細に論じられる。

(三七) 董以寧『正誼堂詩文集』康熙書林蘭蓀堂刻本。

- (三八) 陳維崧「壬子仲冬重過如臯未三日復有延令之役臬民先生賦詩贈別依韻奉酬五首」其三(『補遺』三)。
- (三九) 「虞美人・過青駝寺感旧寄示冒子青若」(『詞集』卷五)の自注に「昔年雲郎隨予北上、於此地遇青若」とある。「青若」は冒丹書の字。
- (四〇) 冒襄『同人集』卷四「与冒襄書」。
- (四一) 蔣景祁「迦陵先生外伝」に「紫雲從迦陵婦、冒弗問也。」「陳維崧集」附録一。
- (四二) 張次溪「雲郎小史序」、「清代燕都梨園史料」中国戲劇出版社、一九八八年、九五七頁。
- (四三) 黄景仁「兩当軒集」卷十七、上海古籍出版社、二〇一三年。
- (四四) 本項の「滿江紅」の題注に「曼殊工演邯鄲夢劇」とある。
- (四五) 『白雨齋詞話』卷三、七四條。
- (四六) 「懷州歲暮感懷」其四(『詩集』卷四)「中原喜見雁重来」の自注に「九青再至」とある。
- (四七) 『湖海樓詩稿』卷十二、陳履端刻本(張傑『断袖文編』天津古籍出版社、二〇一三年、六〇八頁)。
- (四八) 沈初「蘭韻堂詩文集」卷十二「紫雲硯歌為葯洲中丞作」題下注。本作品の存在については河北衡水の馬馳氏より教示を受けた。
- (四九) 「与李瑤田劉維祺小飲邵生家兼聽其絃索即次劉安劉先生韻」(『詩集』卷二)。
- (五〇) 『湖海樓詩稿』卷十二、陳履端刻本(張傑『断袖文編』天津古籍出版社、二〇一三年、六〇八頁)。
- (五一) 『白雨齋詞話』卷三、八八條。
- (五二) 徐紫雲の没年を明記した資料はなく、冒広生「雲郎小史」六の考証に従う。
- (五三) 冒広生「雲郎小史」六「紫雲葬地、必在近所、垂楊黄土、已無可問」。

- (五四) 『迦陵詞』 南開大学出版社、二〇〇九年。
- (五五) 『(周) 年譜』 四八五頁。
- (五六) 『(周) 年譜』 では康熙十三年に繋ぐが、内容から見ても徐紫雲没後の作品であり、「雲郎小史」の見解に従う。
- (五七) 『白雨齋詞話』 卷七、十一条。
- (五八) 楊倫「湖海樓文集序」、周韶九『陳維崧選集』「集評」上海古籍出版社、一九九四年。
- (五九) 『白雨齋詞話』 卷三、六三・四條。
- (六〇) 朱祖謀『彊村語業』 卷三、民国彊村叢書本。
- (六一) 施擘『中国古代文学中的同性恋書写研究』 第三章・四章を参照。

(はやかわたいき・日本学術振興会特別研究員)